竹の子川柳会

秋になり肌寒くなる朝の外　中一　清原　瑠依

秋空に見とれて歩く帰り道　高二　山口はると

月明かり道案内する秋の夜　中一　吉良ちひろ

夏よりも秋の食べ物魅力的　中一　菅元　聖羅

秋晴れの空にピストルよくひびく　高二　槙　美琴

ゆれるたび皆があわてて身を守る　高二　渋谷　裕紀

ブランコにのってゆらゆらきもちいい　小四　梶野　海斗

満員のゆれる電車で当たる肩　高三　山口　悠李

みの虫はゆれるベットでとうみんだ　小三　小原　麗羽

おとなはねきんにくかたいりっぱだな　小四　石崎　海士

川の石かたくて足がいたくなる　小五　梶野　峰士

ライオンはかたいものでもかみくだく　小五　渕本ななみ

このかたい意志は誰にも壊せない　高三　藤森　柚樹

敵同士けれどもかたいあくしゅする　高一　槙　美咲

ふらふらの意志で大物にはなれぬ　栗木　一郎

ふらふらに肩貸す下戸のお人好し　宮川　柳酔

反動をよぶ原発の再稼働　宇津本アヤ子

不安への反動デモがふくれ出す　男武志津江

図に乗った途中で梯子外される　若宮　賢敬

クラス会途中一気に子に帰る　渡辺　照子

何もかも途中ですけど不満でも　水野すみこ

あれこれと途中で迷う悩みごと　渡辺　光男

途中下車せずに人生長い旅　熊本　忠眞

口喧嘩しても笑って幕を引き　山本　雅之

夢を追う子らの笑顔が美しい　米子　達雄

子孫達揃い笑顔のいい夕餉　川添　忠昭

山田の案山子ふらふらせずに見張り役　松本たつこ

ひよし川柳会

鬼北の足跡を辿る…【等妙寺編　第4回】

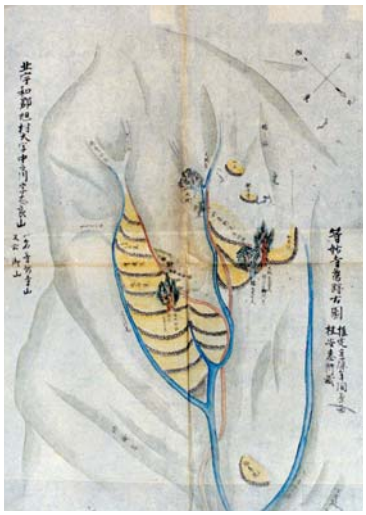
中世の等妙寺の姿③

「宇和旧記」には、元徳2年（1330）七堂伽藍（寺として必要な堂塔施設）を備え、十二坊（十院一坊一庵）を造営、それは「智光院・福寿院・如意顕院・戒蔵院・浄土院・総堂院・不動院・説性院・上蔵院・宝蔵坊・延命院・霊光庵」ということが記されています。史跡地では、確かに、十二箇所以上の平場を確認できますが、その場所まで特定することはなかなか困難です。

平成10年に松山大学付属図書館所蔵の「等妙寺旧跡古図」（写真）が報告されました。この古図は江戸時代に描かれた図を郷土史家が写したものですが、現地形と照合が可能なほどに、石積みを伴った平場や谷川、道の位置関係がはっきりと描かれ、各所に地名が記されています。十二坊中の七坊まで名前が見え、場所の特定につながる貴重な史料です。

また、地名は景観や歴史的経緯によって人々が暮らす上で必要な空間を示す符号として付けられてきました。小字名・ホノギや昔からの通称名には、その語源となった意味が必ずあります。今の等妙寺の境内地は、ホノギで「霊光」、つまり庵があった場所だと考えられます。その周辺には「寺道」「古寺山」といった寺を示す地名や「堀切」や「ついち（築地）」（塀のこと）といった施設関連の地名もみられ、当時の景観を想像するヒントを与えてくれます。

かつて本堂があった平場は、地元で「ホンジガナル」（本寺の平らなところの意）と呼ばれていました。古図には「如意顕院」「本坊跡」と記され、本堂、本坊跡のどちらが正しいのかははっきりしませんでした。しかし、近年の発掘調査で、そのどちらの建物もあることが確認できました。詳しくは、中央公民館のロビーにて展示していますので、お立ち寄りの際はぜひご覧ください。



等妙寺旧跡古図（写）